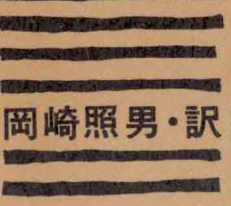




パパラギ



はじめて文明を見た南海の酋長ツイアビの演説集



岡崎照男・訳

*** 訳者紹介**

(おかざきてるお)

昭和26年7月生まれ。
新潟県出身。青山学院
大学理工学部卒業後イ
ギリス・エジンバラ大
学を経てスイス・ベル
ン大学入学。現在同大
学文学部哲学科在学中。

ギ ラ パ パ



1981年4月30日 第1刷発行

1982年3月15日 第6刷発行

定価 580円

パパラギ

——はじめて文明を見た南海の酋長ツイアビの演説集

訳者 岡崎照男

発行者 下野 博

発行所 株式会社 立風書房

〒141 東京都品川区東五反田3-6-18

電話 03-447-1191

振替 東京5-74493

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

©1981 RIPPUSHOBO

■落丁・乱丁本はお取替え致します

0098-93007-8909

パラギ（口にするときは パランギ）とは

白人のこと 見知らぬ人のこと

でも 言葉どおりに訳せば

天を破って現われた人

はじめてサモアに來た白人の宣教師が

白い帆船はふねに乗っていた

遠くに浮かぶ白い帆船を見て

島の人たちは それを天の穴だと思った

白人が その穴を通して彼らのところへやって來た

—— 白人は天を破って現われた



立風書房

*本書は1920年、バーデンの
フェルゼン社発行初版本の改
訂新版である。

日本語版翻訳権独占
立風書房

© 1981 Rippu Shobo

DER PAPALAGI

Die Reden des Südsee-Häuptlings Tuiavii aus Tiavea

Copyright © 1979 by Tanner+Staehelin Verlag AG, Zürich

Japanese translation rights arranged with

Tanner+Staehelin Verlag AG, Zürich

through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

《こちらの世界とあちらの世界》 柏村勲

8

《エーリッヒ・シヨイルマンのまえがき》

11

パバラギのからだをおおう腰布とむしろについて

17

石の箱、石の割れ目、石の島、そしてその中に何があるかについて

27

丸い金属と重たい紙について

37

たくさんの物がパバラギを貧しくしている

49

パバラギにはひまがない

59

パバラギが神さまを貧しくした

67

大いなる心は機械よりも強い

77

パバラギの職業について——そしてそのため彼らがいかに混乱しているか

85

まやかしの暮らしのある場所について・東になった紙について

95

考えるという重い病気

105

パバラギは私たちを彼らと同じ闇の中に引きずりこもうとする

117

《この本について》 ベルトール・ディール

127

《訳者あとがき》 岡崎照男

131

私がこの本に書かれている酋長ツイアビの話を、最初に読んだのは、訳者岡崎君のペン書きの原稿であった。それは、真面目な学生が、難解なドイツ語の文章を、辞書と首っ引きで懸命に訳した体のもので、横書きのレポート用紙に、几帳面にまとめられてあった。

直訳風の文体も面白かったが、読み進むうちに、酋長ツイアビが私の目の前に居て、訥々と然も雄弁に、直接語りかけているような興奮を覚えたのだった。

ウポル島（西サモア）ティアベアに住む酋長ツイアビは、おだやかな親切そうな大男。背が二メートル以上もあって、がっちりした体つきにもかかわらず、女のように細い柔らかい声を響かせ、彼の濃い眉に覆われた大きくて黒い目は、どこか人を寄せつけない固いものを持っていたが、人が話しかけるとその冷たい目はみるみる燃え上がり、心あたたまる明るい光を放つのだった。（南太平洋では、よく見かけるタイプ。おだやかで滑稽なほど莊重で、それでいて人なつっこい、ごく一般的なサモア人酋長）

だが、他のネイティブたちとちょっと違うところは、パラ、ンギ（白人・パパラギが転訛）たちを、原始的な民族から区別する精神的な力、はっきりした意識を持っていたということである。そして、

後にヨーロッパの国々を回り、鋭^{すど}すぎるほどの冷静な、先入観に邪魔されない観察力を持って、白人社会の文化と生活様式について正確な知識を集めてきたのである。

ツイアビは、淡々と静かに語る。

パラングの信仰するキリスト教と神の大きな心との違い、パラングの行動の矛盾^{むじかん}。服装のこと、日常生活、パーティ、住宅、道路と町。金銭と経済、職業と職種、田舎^{いなか}と都会^{みやこ}の子。そして、時間感覚の相違や近代文明の機具機械、マス・コミュニケーションの不思議など、文明社会のあらゆる面にわたっての批評と意見。物がたくさんなければ暮らしていけないのは心が貧しいからだ、パラングの考える最高の知恵よりも一本の椰子^{やし}の木の方が如何^{いか}にかしくすばらしいか……等々。明敏なるわが兄弟よ、と呼びかけながら仲間に語るのである。

酋長ツイアビが、実際にサモアの人々に『布教活動』をしたかどうかは知らないが、彼の語り口は、たしかに名伝道師の説教と同じように、聞く人の胸に滲透^{しんとう}し、強烈な説得力があるのである。それは、思ひ上がった文明社会に対する静かな神の警告、文明の罫^{わな}に落ち込もうとする仲間に対する啓蒙^{けいも}、美しい自然と共に生きる原始民族の讃歌^{さんか}だ、と私は思った。

*

サモアのみならず、現在でも南太平洋に散在する島々の全般にわたって、パラングという言葉が、ヨーロッパ人（白人）と同意語として使われている。それは、同時に文明人という意味も持つが、例

えばサモアでもトンガでも、私たち日本人に対しては、シャパニとは呼ぶがババラギとは呼ばない。シャパニ（日本人）はパラング（白人）ではない、シャパニはブラザーだと、はっきり言い切るのである。だが、残念なことにシャパニの心は、実はある面ではもうはっきりとパラング的であり、あるいはパラング以上かもしれないのである。南太平洋民族が使うパラングという言葉の中には、往々にして輕蔑（けいべつ）と反発（はんぱつ）が、強くこめられているように感じられるのは事実である。私は、彼等が呼ぶシャパニという言葉の中に、いつかこのパラングの語感に加えて、憎しみがこめられたりしないよう祈らずに
いられない。

*

私たち文明人は、都会に住み、忙しければ忙しいほど自然に憧（あこが）れ、自然によって疲れを癒（い）やし慰（なぐさ）めを得ようとする。観葉植物を部屋に持ちこみ、水槽に熱帯魚を入れ、自分の子供と同じように犬や猫を可愛（かわ）いがったりする。

私も、かつて井（い）の頭（かぶ）自然文化園の大温室（熱帯植物が繁（しげ）り、小鳥が自由に飛び回っている）の中に、ベッドと小さな台所を持ちこんで、そこで暮らせたらどんなに幸せだろうと夢みていた頃があった。その後、家族を連れて約一年間、トンガで暮らしたのであるが、そこでは毎日が眼を洗われるようなことの連続であった。（*トンガ王国。トンガはサモアから約五百マイル南に点在する島で、昔サモア人がここに移り住んだといわれている。因（ちな）みにトンガとはサモア語の南の意）

観葉植物を部屋に持ちこむことも悪くはないが、自然を家の中に持ちこむことよりも、この偉大な自然からどうやってこの小さな人間を守るか、がまず問題なのだ判った。そして、屋根を轟かせてスクールの去った朝、太陽にきらめく草の露を見ても、いつものように遊んでいる鶏や小鳥を見ても、驚きと尊敬と感謝で心が一杯になってしまふのである。水槽に魚を入れてながめるよりも、水中メガネを持ってリーフに行く方が、はるかに気持ち安らぐのである。揚句、何とかしてガラス箱の部屋を海に沈め、魚たちにながめられながら静かに酒が飲みたい、と思うようになってくる。いわゆるこちらの世界という発想の転換というヤツが、あちらの世界に住んでいると、ごく当たり前のものとして湧いてくるようになるのである。

鶏が、雉子のように飛ぶのも当たり前のことだ。犬は、鶏やひよこ、仔豚に噛みついてはいけない。そして主人やその子どもに忠実で、自分のテリトリーをしっかりと守れる犬だけが、ここでは生きる権利がある。

人間は、大声で笑い、歌い、時には泣き、素足や肌は直接神の大きな心を吸いにとって活力にあふれ、老いることがない。事実、私がそこで暮らしていたときは、たしかに自分が生きていることを実感し、充実感に満ち満ちていた。毎日が一日ずつ若返っていく思いであった。

*

ツイアビがいうように、文明は彼等に光りを与えるのではなく、暗闇にひきずりこもうとするもの

なのだろうか。私たちの文明は、果たして、私たちをユートピアに運んでいってくれているのだろうか。私たちが住んでいるこちらの世界は、もしかすると間違いだらけなのではないだろうか。私たちは、こちらの世界の視点から、たまにはあちらの世界の視点に転換して、酋長ツイアビの言葉を噛みしめ、全てのものを見直してみる必要があるのではないだろうか。

(かしわむらいさお 画家)

ツイアビは、原地語のまま眠っていたこの話を、ヨーロッパで発表したり、ましてや本にするつもりなどはまったくなかった。

彼はただ、ポリネシアの自分の国の人びとのためにだけ、この話を考えた。私は彼の了承なしに、さらにはその意志にさからって、これをヨーロッパの読者に紹介したのである。なぜなら、深く大自然と結ばれているこのひとりの原住民の目が、いったいどのように私たちを、そして私たちの文明を見ているかが、ただ興味深いだけでなく、そこから何かを学びとることは、私たち白人、啓発された人間にとって非常に意義深いものであると信じたからである。

私たちは、彼の目という、私たちにはもう絶対に持ち得ない視点を通して、私たち自身を経験する。彼の観察は、特に狂信的に文明を信じている人びとにとっては、無邪気、いやそれどころか、馬鹿げていて愚にもつかないように映るかもしれない。しかし、いくつかの言葉は、真の理性を持った人、人生をしっかりとみつめる人びとを、深い思索と自己批判へ導くだろう。それというのも、ツイアビの明敏さは、神の持つ簡潔さからきたものであり、学んだ知識に由来するものではないからである。

この話は、ヨーロッパ大陸の進んだ文明から自分を区別し、解放しようとする原始の人びとの呼び

かけであり、それ以外の何ものでもない。

ツイアビは、ヨーロッパを軽蔑^{けいべつ}していて、彼の先祖がヨーロッパの光りを喜んで迎え入れたことを、大きなまちがいであったと深く信じていた。

昔、ファガサ島へ最初の白人宣教師がやってきたとき、ひとりの娘が海岸のリーフの上で、からだを扇^{あふぎ}で隠しながら宣教師たちに向かって、「近づくな、あっちへ行け。おまえたちは災^{わざ}いを起こす悪魔どもだ」と叫んだそうである。その娘と同じように、ツイアビも、ヨーロッパで暗い悪魔を見た。災^{わざ}いをひき起こし、すべてを破壊してしまう恐ろしい原理を見てしまった。

私をはじめツイアビに会ったのは、彼がヨーロッパの世界から遠く離れたサモア諸島のひとつ、ウポル島で平和に暮らしていた頃である。彼は、島のティアベアという村のいちばん偉い酋長であった。私は、彼から、おだやかな親切そうな大男という感じを受けた。彼は、背が二メートル以上もあって、非常にがっしりとしたからだつきをしているにもかかわらず、外見とは正反対に、女のように細くて柔らかい声を響かせていた。濃いまゆにおおわれた大きな黒い目は、どこか人を寄せつけない固いものを持っていた。しかし、人が話しかけると、その冷たい目はみるみる燃え上がり、心暖まる明るい光りを放つのであった。

ツイアビは、他の原住民たちと少しも変わるところがなかった。カバ酒（サモアの民俗的飲み物。カバの木から作る）を飲み、朝と夕べにはロト（礼拝）に行き、バナナとタロ芋^{いも}とジャムを食べ、島の風俗と習

慣の中で生活していた。ただ彼のごく身近な人だけが、ときおり、たとえば彼が家のむしろの上で、なかば目を閉じて夢を見るように横になっているときなど、何かが彼の心の中でふつつつと発酵し、淨化されつつあるのを知っているのであった。

他の原住民たちが、周囲の環境や、自分自身へ思いをめぐらすこともなく、子どものように感覚や瞬間の中に生きているのに対し、ツイアビは例外的な存在であった。彼は、他の原住民から抜きん出ている。私たちを、他の原始的な民族から区別する精神的な力、意識を、彼は持っていたのである。

おそらく、ツイアビの願いはこの特異性から出たのであろう。彼はヨーロッパへ行きたいと願った。熱望的なこの願いは、まだ彼がマリステンの宣教師学校へ通っていた頃からのもので、彼が成人してからようやく実現された。当時ヨーロッパ大陸に向かった視察団とともに、新しい体験を望んでこの男は旅立った。そしてヨーロッパの国々をまわり、その文化と生活様式に関する正確な知識を集めてきた。

私は、一度ならず彼の細部にわたる知識の正確さに驚かされた。彼は、するどすぎるほど冷静な、先入観に邪魔されない観察力を持っていた。彼の前では、どんな言葉も真理をおおい隠すことはできなかった。彼はいつも、対象の本当の姿をするどくみつめていたのである。なんとうまく、彼は自分の仕事をやりとげたことであらうか。

私が、彼とほとんどくっつくようにして生活していた一年以上の間——私はその頃、村の住民のひ

とりとなっていた——私の中のヨーロッパ人的なものを、彼が残らず乗り越え、忘れ去ってくれらるまで、私は決して友としては扱ってもらえず、私たちがよりやく友だちとなつてからはじめて、彼はうちとけて話をしてくれたのだ。それは私が、彼の素朴な真理を十分理解できるまでに成長したことを、そして決して笑い出さないことを彼が知ったときであつた（事実、私は一度も笑わなかつた）。

彼は、手記の中から断片的にひとつずつ抜き取つて私に聞かせてくれた。力をこめることもなく、演説的な口調もなく、彼は読んだ。その平坦な読み方は、それらがまるで遠い歴史的な事実でもあるかのように、彼の言葉を透明に、明確にし、私はこの話をぜひとどめておきたいと思つた。ツイアピが私に手記を渡し、私の個人的な注釈のためにだけ使うのであればと、そのドイツ語訳を承諾してくれたのは、ずっとものちになつてからのことである。

彼は、手記に記録した材料が頭の中で整理され、明瞭になつたときに、彼の「布教活動」——と、私は呼んでいた——をポリネシアの島々で展開するつもりだつたのである。しかし、私はそれ以前に太平洋を出なければならなかつた。

この手記をできるだけ忠実に訳そう、なるべく素材を変えまいと努力したにもかかわらず、私は今、その真の感覚や呼吸が失われてしまつたことに気がつく。しかし、原始の言葉を現代の言葉に訳すことのむずかしさ、彼の子どものような話しぶりを、平凡に陥ることなく、風味を失わずにそのまま表現することの不可能さを思いやってくれる人なら、私のこの訳を喜んで許してくれるだろうと思

う。

すべてのヨーロッパの文化的業績を、ツイアビ、この文明を持たない島の住人は、誤りとして、出口のない袋小路として見ていた。もしそれが、謙虚な心も素朴さもなしに語られたことなら、このうえもなく僭越に見えたに違いない。しかし彼は、話の中で、白人たちの魔力を警戒し、それにとらえられないようにと島の人びとに呼びかけている。その声がいたみに満ち、憎しみからではなく人間愛から出ているものであることは明らかである。

別れるとき、彼はこう言った。「きみたちはわれわれに光りを持つてくると信じているかもしれないが、本当は違う。きみたちはわれわれを暗闇の中に引き込もうとしているのだ」

世界戦争によって、私たちヨーロッパ人は、人間そのものに対する不信を持つにいたった。今こそもう一度、物ごとを調べ直し、私たちの文明は、果たして本当に私たちに理想へ向かわせるものであるかどうか考え直さなければならない。そのために、私たちが受けた教養というものを、しばらくのあいだ忘れて、この南の島の民の、素朴な考え方の視点に沈み込んでみようではないか。教育という名の重荷を知らず、感ずることでも見ることも、けがれのない原初の人である島の民の。死んだ偶像を作るために、私たちが真実の神を捨ててしまったことを、彼は私たちに気づかせてくれるだろう。